



『錢謙益「病榻消寒雜咏」論釋』二十二、二十五の
翻訳及び補論

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-11-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大平, 桂一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00017135

『錢謙益「病榻消寒雜咏」論釋』二十二、二十五の翻訳及び補論

嚴志雄撰

大平 桂一 訳 及び補論

前言

「病榻消寒雜咏四十六首」¹は錢牧齋が康熙二年（1663年）十二月二十八日に書き始めた七言律詩の連作である。康熙三年五月二十四日に錢牧齋は亡くなっているのに、「病榻消寒雜咏四十六首」は彼の遺作といえるであろう。嚴志雄氏の『錢謙益「病榻消寒雜咏」論釋』²は錢氏の遺作の典故を明らかにし、詳細に分析した書物で、現代の中国文学研究界の一つの到達点を示す作品である。本書は「上編 研究編」と「下編 箋釋編」に分かれる。研究編はまず「導論」で『清史稿』文苑傳、『清史列傳』貳臣傳を材料に、彼の死後における人物評価を総括したうえで、嚴氏はそれらの評価（歴史的・道徳的）を軽視することなく、牧齋の詩の「一章一句」にこだわって評価解釈を行いたいと言明し、また「一章一句」にこそ錢牧齋の魅力は存すると強調する。第一章では、錢牧齋の「自我技芸」(techniques of the self)を論じ、晩年の自我重視と「救世の詩」論をとりあげる。第二章では、「病榻消寒雜咏」の序文をとりあげ、錢牧齋がいかなる自画像を読者に提供しようと試みたかを論ずる。また自画像 (self-portraiture) と自我再現 (self-representation) の間の微妙な関係についても触れている。第三章では「病榻消寒雜咏」に出現した仏教のイメージを題材として、錢牧齋の臨終の精神状態や心境を観察している。第四章では、「病榻消寒雜咏」の中で最も多くの人物が描かれる第十首に焦点をあて、五名の人物の経歴、牧齋との交遊を詳細にたどることにより、錢牧齋が死後に残そうとした自我のイメージを探究している。「箋釋編」は牧齋の詩を「古典」(classical allusions) と「今典」(topical allusions) の二つの面から解き明かそうとするものである。「読者が詩の本文、注の文章、箋の文章を別個に読む必要がなく、無理なく最後まで読み通し、詩全体の趣旨、イメージ、背景的知識をはっきりとつかみ、牧齋の詩の奥深いところまで到達すること、これこそ本書牧齋詩箋釋の最終目的である。今日、古典詩文の注釈に新たな命を吹き込むために本書における箋釋の論述の方法は、些かの貢献をなすものと信ずる。」(36頁)と嚴氏が述べるように、『錢謙益「病榻消寒雜咏」論釋』は、有用な書物であると同時に、読者を楽しませる書物である。本論考は、箋釋編の二篇を翻訳し嚴氏の方法論の一端を垣間見ていただくと同時に、補論を付け加える。

『錢謙益「病榻消寒雜咏」論釋』上編は論文として扱われ、嚴氏は引用文献の書誌を頁数まで書いておられるが、「箋釋」において嚴氏はテキストの原典の書誌を書いておられない。そこで訳者が「箋釋」で嚴氏が引用したテキストの原典の書誌をあげる場合には、以下のように処理した。「☆」を付している箇所は、「箋釋」ではなく、『錢謙益「病榻消寒雜咏」論釋』上編「蒲團歴歴前塵事」の嚴氏による注記を示し、それ以外は巻末の「参考書目」の書誌をあげ頁数は省いた。なお「訳者注」と記した注以外はすべて原注である。

(一)「病榻消寒雜咏」其の二十二

推篷剪燭夢悠悠 篷を推し燭を剪りて夢悠悠たり
舊雨依稀記昔遊 舊雨 依稀として昔遊を記す
南國臬盧誰劇孟 南國の臬盧 誰か劇孟たる
北平雞酒有田疇 北平 雞酒 田疇有り
霜前啼鳥皆朱囑 霜前の啼鳥 皆な朱囑たり
月下飛鳥盡白頭 月下の飛鳥 盡く白頭なり
病樹枝顛天一握 病樹 枝顛 天は一握
爲君吹笛上高樓 君が爲に笛を吹きて高樓に上る
廣陵人傳研祥北訊。 廣陵の人研祥の北訊を傳う。

【箋釋】

牧齋は本章の後に置いた自注で、「廣陵の人研祥の北訊を傳う」と言っている。研祥とは、馮文昌であり、明代萬曆年間の名臣・文人であった馮夢禎（字は開之、1548?-1605）の孫である。（陳寅恪は『柳如是別傳』³において、研祥は「馮開之夢禎の孫文昌の子」であると述べているが、正確さを欠く。）馮夢禎がなくなった時、牧齋は二十四歳で、故郷で學業を続け、科擧の受験勉強をしていたため、直接薰陶を受けられなかった。後に詩文の中でたびたび馮夢禎を賞賛しており、牧齋が尊敬して已まなかった才人であった。牧齋の『列朝詩集』丁集下に詩を何首か収録しており、馮夢禎の小伝⁴では以下のように述べている、「余其の墓に誌し、以謂らく、「位は大ならず、齒は尊^{とし}からず、風流は弘長にして、海内に衣被す、謝安石の伎を攜え藥を采り、房次律⁵の鳴琴弈棋し、天下は王佐を以てこれに歸し、固より用不用を以て軒輊^{もんたい}にせざるなり⁶。『眞實居士集』若干卷有り、詩文を爲るや疏朗通脱、刻鏤して以て工を求めず。而して佛乘の文は愍大師も極めてこれを推し、以て宋金華⁷の後、一人と爲すなり。孫の文昌は博學にして修を好む、實に余に請いて公の葬に誌せと云う。」ここから牧齋の馮夢禎への敬意を垣間見ることができる。牧齋は馮夢禎のために「南京國子監祭酒馮公墓誌」を書き、『初學集』⁸卷五十一に収められている。その文末に、「公は萬曆乙巳〔1605〕十月廿二日に卒す、享年五十有八。子は三人、驥子、鷓雛、去邪、公を西溪の梅塢に葬る、公の樂游する所にして家を攜えんと欲するの地なり。余は鷓

雛と好く、驥子の子文昌は吾が門に遊ぶ。公の歿後三十八年、文昌は其の父の述ぶる所の行状を奉りて來り銘を請う。」とあって、牧齋と夢禎の子弟が友人で、研祥が牧齋の門下生となり、弟子と称したのは、この文章が作られた年よりも遅くなることはなく、即ち崇禎十五年（1642）前後であることがわかる。馮氏は何世代にもわたって凶画骨董書籍の収蔵に熱心で、夢禎は「移病し官を去」ってからは、西湖孤山の麓に庵を建て、「快雪時晴帖」を所蔵し、堂を「快雪」と名付けた。『初學集』卷八十五「董玄宰の馮開之に與える尺牘に跋す」に「馮祭酒開之先生、王右丞の「江山霽雪圖」を得たり。快雪堂に藏弄し、平生鑒賞の冠爲り。董元宰〔其昌〕史館に在りて、書を誦りて借閱す。祭酒は三千里の外から緘寄し、年を経て後に歸る。祭酒の孫研祥玄宰の畫を借る手書を以て裝潢して冊を成し、余に屬してこれを志さしむ。祭酒歿し、此の卷は新安の富人に購去せ爲れ、煙雲筆墨、銅山錢庫中に墮落すること三十餘年なり。余黄山に遊び、始めてこれを贖いて出す」とある。牧齋の黄山旅行は崇禎十四年（1641）二月の事であり、董其昌が馮夢禎に与えた書簡の跋文を書いたのは、官を辞して以後、則ち崇禎十四五年あたりであり、そのころ研祥が牧齋門下に加わっていたことがわかる。

清代に入った後、牧齋が研祥を詠じた作品で、制作時期がはっきりしているものが四首ある。『有學集』⁹卷二「秋槐詩支集」に載せられている「馮研祥金夢蜚 千里を遠しとせずして武林自り我を白門に嘔い喜びて作る有り」詩と「前韻に疊し、研祥・夢蜚を送別す三首」は、集目には「己丑〔1649〕の年に起こり、庚寅〔1650〕四月に盡く」とある。卷十「紅豆詩二集」に載せられている「酒知己に逢う歌 馮研祥に贈る」詩は、集目には「己亥〔1659〕に起こり、一年に盡く」とある。さらに卷十三の「病榻消寒雜咏四十六首」のこの作品である。「病榻消寒」が「廣陵の人研祥の北訊を傳う」という状況下で作られているのを除けば、すべて牧齋と研祥が面会した折の作品である。牧齋の清に入ってから作品の中で、研祥に言及したものはそれほど多いというわけではないが、その制作の時期と内容から判断して、研祥が終始牧齋の弟子であり、牧齋が病に臥していた時も研祥の消息に関心を持っていたことが分かるし、牧齋が研祥を如何に気にかけていたかも分かるのである。（葛萬里の『牧齋先生年譜』¹⁰には、牧齋が順治七年〔1650〕夏五月金華に旅行した時に「同行したのは馮范研祥であった」と書いているが、根拠が分からない。また馮と范は二人の人物なのに、葛氏は誤って一人としている。）

馮研祥の生涯は現在定かではない、文献が不足しているからであり、その著『吳越野民集』は今伝わらないようである。断片的な記事によれば、馮研祥、号は吳越野民、その書齋に「三餘堂」と名付けた。諸生で、杭州の西湖に住み、書画をよくし、多数の作品を所蔵していたという。宋刊の『金石錄』十巻を手に入れ、家宝とし、その跋文を書き、「金石錄十巻人家」という印章を彫らせ、その書簡等の前後には必ずその印章を押した。（『武林藏書錄』『清稗類鈔』などによる）黄宗羲の『思舊錄』¹¹「張溥」の条に、「甲戌〔1634〕、余は馮研祥と同一太倉に至り、端午に値り、天如は舟中に宴

して、以て競渡を觀る、遠方より來り贅を執る者紛然たり。」とあるので、研祥は若いころから復社の人々と交際があったのである¹²。

牧齋は馮夢禎を賞賛し、その賞賛は「風流弘長にして、海内に衣被す」という一面に偏っているが、詩作で研祥を詠ずる場合には、研祥の自分に対する終始変わらぬ情義を褒め称えている。順治五年（1648）秋から、六年（1649）春にかけて、牧齋は黃毓祺の事件の係り合いで、南京で逮捕され、翌年まで投獄されていた。先に述べた「馮研祥金夢蜚千里を遠しとせずして武林自り我を白門に暗い喜びて作る有り」詩と「前韻に疊し、研祥夢蜚を送別す三首」はまさにこの時期に作られた。「馮研祥金夢蜚千里を遠しとせずして武林自り我を白門に暗い喜びて作る有り」詩は、「冬を踰えて死を免れ又た句を経たり、四海相い存す兩りの故人。吳淞 天に各ること嶺嶠の如く、干戈 地に滿つること風塵の況し。燈前 細かに認む平時の面、坐ること久しくして頻りに驚く亂後の身。詹尹¹³ 朝來 好語を傳う、知る可し容易に斯の晨有らんことを」となっている。研祥と夢蜚（金漸皋、字は夢蜚、号は怡安、仁和の人）が別れを告げると、牧齋は恋々として別れがたく、「前韻に疊し、研祥夢蜚を送別す三首」詩を作った。その中に、「殘生の握別¹⁴多涙無く、亂世の遭逢 幾身有らんや」（其の一）、「關心 憔悴 死よりも過しきは無く、手を執りて叮嚀し 此の身を要す」（其の二）、「自ら顧みて但だ餘す驚破の膽、相い見て莫是くは意生¹⁵の身ならん」（其の三）の句がある。これらの過去の出来事は、十数年後牧齋が病床で研祥を詠じた詩を理解するのに非常に重要な要素である。

牧齋は「病榻消寒」詩で研祥を詠じているが、その起聯は「篷を推し燭を剪りて夢悠悠たり、舊雨 依稀として昔遊を記す」である。この詩の雰囲気は李商隱の「夜雨寄北」の「君歸期を問うも未だ期有らず、巴山 夜雨 秋池に漲る。何當か共に西窓の燭を剪りて、卻て話さん巴山夜雨の時を」¹⁶を彷彿とさせる。当時研祥は北方におり、李商隱の詩題「北に寄せる」は牧齋が思いやる方向と一致している。この聯には近い時代の典故があり、錢曾の注がすでにそれを指摘している通り、牧齋の詩の冒頭「篷を推す」一語も架空の描写ではないことが分かる。錢曾の注は李東陽の『懷麓堂詩話』¹⁷を引用する、「維陽の周岐鳳は藝能多きも、事に坐りて亡命し、扁舟もて無錫に野泊す。錢曄これに投ずるに詩を以てし、「一身 客と爲ること張儉¹⁸の如く、四海 何人か是れ孔融なるや？野寺 鶯花 春に酒に對し、河橋 風雨 夜 篷を推す」の句有り。岐鳳は詩を得て、これが爲に大いに働き、江南の人今に至るもこれを傳う。」李東陽の詩話は、錢曄の詩の首聯と尾聯を省略しているが、実は牧齋のこの聯の詩意は錢曄の作の首聯と尾聯に関係がなくもないのである。朱彝尊『明詩綜』¹⁹卷二十三は錢曄の全詩をのせており、次のようになっている、「琴劍飄零す 西復た東、舊遊 清興 幾時に同じなるや？一身 客と作ること張儉の如く、四海 何人か是れ孔融なるや？野寺 鶯花 春に酒に對し、河橋 風雨 夜 篷を推す。機心 盡く屬す東流の水、惟だ家山の夢中に在る有り」。その時、錢牧齋は黃毓祺の事件のために金陵の獄に繋がれていたが、これもまた「事に坐」ったことに変わりなかった（牧

齋は逮捕されて金陵に赴いただけで「亡命」の拳に出たわけではないが。「機心 盡く屬す東流の水、惟だ家山の夢中に在る有り」というのは、正に牧齋の心情が反映されていると考えてよい。錢曄の詩は張儉や孔融の典故を用いて自分の周岐鳳への思念に喩えているが、牧齋の詩もまたそれを借りてきて馮研祥の自分への思い、特に武林から困難に陥った自分を訪ねてくれた彼の情熱と高義を詠じているのである。

次聯は首聯を承けて、「南國の梟盧 誰か劇孟たる、北平 雞酒 田疇有り」という。劇孟は博徒で、男伊達で名を揚げた。『史記』²⁰遊俠傳にいう、「雒陽に劇孟有り、周人 商賈を以て資と爲し、劇孟は任俠を以て諸侯に顯たり。呉楚反せし時、條侯は太尉と爲り、傳車に乗りて將に河南に至らんとするに、劇孟を得て、喜びて曰く、「呉楚大事を舉げて孟に求めず、吾其の能く爲す無きを知るのみ」と。天下騒動し、宰相これを得て一敵國を得たるが若しと云う。劇孟の行いは大いに朱家に類し、博を好み、少年の戲多し。然れども劇孟の母死するや、遠方自ら喪を送るもの蓋し千乗。劇孟の死するに及び、家に十金の財を餘す無し。」同時代の人には、「夫れ一旦急有りて門を叩かば、親を以て解と爲さず、存亡を以て辭と爲さず、天下の望む所の者は、獨り季心・劇孟のみ。」(『史記』袁盎列傳)と噂したという。劇孟は「博を好んだ」が、それは六博のゲームであった。牧齋の句は「梟盧」でそれを表している。梟・盧は六博の中の二つの役で、梟は一で最強、盧は六でそれに次ぐ。また「梟盧」で賭博をも意味する。「田疇」の記事は晉王嘉の『拾遺記』²¹卷七に見え、君主に仕えて終始忠義の心を変えなかった人である。「田疇は北平の人なり。劉虞 公孫瓚の害する所と爲るや、田疇は追慕して已むこと無く、虞の墓に往きて雞酒を設け、慟哭の音、林野を動かす…。疇が草間に臥すに、忽ち人有りて通じて云く、「劉幽州來たれり、田子泰と平生の事を言わんと欲す」と。疇は神悟遠識にして、是れ劉虞の魂なるを知る。既に近づきて拜し、疇泣きて自ら支えず、因りて相與い雞酒を進む。疇醉うに、虞曰く、「公孫瓚子を求むること甚だ急なり、宜しく竄伏して以て害を避くべし！」と。疇は拜して曰く、「君臣の義、生きては則ち禮を盡くすと聞く。今君の靈に見ゆ、願わくは同に九地²²に歸し、死して且つ朽ちざらんことを。安んぞ逃ぐる可けんや！」と。虞曰く、「子は萬古の貞士なり、深く爾の儀に慎め！」と。奄然として見えず、疇も亦た醉より醒む。」牧齋のこの聯は、劇孟の義侠心と田疇の忠貞の心を馮研祥が兼ね備えており、研祥が古の忠義の士のように自分に仕えてくれたことを喩え、対句は精妙を極めてい

第三聯は、「霜前の啼鳥 皆な朱囀たり、月下の飛鳥 盡く白頭なり」である。この聯は第二聯を受けて新しい趣向を出している。「皆」といい、「盡」といつているのは、友人・同志が患難を共にしたことを喩えている。「朱囀」は杜鵑の代称であり、嘴の色が赤いため、杜鵑は泣いて血を吐くという伝説がうまれた。下の句は二つの典故を含む。『樂府詩集』²³卷四十九、「古今樂錄」曰く、「西鳥夜飛」なる者は、宋元徽五年荊州刺史沈攸之の作る所なり。攸之の兵を舉げて荊州を發し東下するや、未だ敗れざるの前、京師に歸らんことを思う。所以に歌を以て和して云う、「白日西山に

落ち、還た去來す」と。送聲に云う²⁴、「翅を折りし鳥、何處に飛ぶや？彈を被りて歸る」と。「白頭」は「白頭同に歸る」の意を用いたのであろう。『世説新語』²⁵仇隙篇に、「孫秀既に石崇の綠珠を與えざるを恨み、又た潘岳の昔これを遇するに禮を以てせざるを憾む。……石崇・歐陽堅を收め、同日に岳を收む。石先に市に送られ、亦た相い知らず。潘後れて至り、石は潘に謂いて曰く、「安仁、卿も亦復た爾るや？」と。潘曰く、「白頭歸する所を同にすと謂う可し」と。」（潘岳は以前に「金谷集作詩」有り、「春榮 誰か慕わざるや？歳寒 良に獨り希なり。分を投じて石友に寄す、白頭 歸する所を同じくせん」と。同時代の人々は潘の詩が偶然その後の運命の予言となったとしている。）杜鵑が泣いて血を吐くのは故国を思うからである。「西鳥」と「白頭」は危急存亡の時に発する言葉である。牧齋のこの聯は、自分と研祥が故国と旧君を忘れない遺民であり、危険な境遇にあることを比喻しているのではないだろうか？研祥の事跡は不詳であり、軽々にそのような事実があったかどうかは判断できない、他日再考することとしたい。

末聯は、「病樹 枝顛 天は一握、君が爲に笛を吹きて高樓に上る」である。上の句は危険な境遇に瀕していることを喩えており、その典故は『太平廣記』²⁶（『玉堂閒話』より出づ）に見える。「興元の南に、大竹路有り、巴州に通ず。其の路は則ち深谿峭巖にして、蘿を捫り石を摸して、一たび上ること三日にして、山頂に達す。行人止宿すれば、則ち絙蔓を以て腰に繋ぎ、樹に縋らせて寝ぬ。然らざれば、則ち深淵に墮つこと、黄泉に沈むが若きなり。復た登りて大嶺に措る。……其の絶頂はこれを孤雲兩角と謂う。彼中の諺に云う、「孤雲兩角、天を去ること一握なり」と。」高低差激しく険しい山道では、通行人は「絙蔓を以て腰に繋ぎ、樹に縋らせて寝」ねながら進み、ようやく高所からの墜落を免れることができる。牧齋は「病樹」と言っているので、このやり方も効果がないかもしれない。牧齋の「危言聳聽」²⁷を見、「廣陵の人研祥の北訊を傳う」という自注を読めば、研祥を取り巻く事態があまり良くなさそうであることが分かる。牧齋が前年（康熙元年1662）秋に作った詩「秋日雜詩二十首」（『有學集』卷12）の第十九首の後半では研祥に言及している。「西陵の短馮生²⁸、卓犖²⁹として亦た等倫たり。亂世 網羅を干し、傭雇せられて其の身を全うす。舉擧たる³⁰鮮華の子、頭を蒙むは灰と涸塵と。吾衰えて二子を失わば、吟蹠³¹として半人³²なるを嗟く。馮生盍んぞ歸り來らざるや、我に東海の濱に従え。」これから判断すると、研祥は官長とのあいだにイザコザが起り、外地に流浪していたのかもしれない。「病榻消寒」詩の末聯「君が爲に笛を吹きて高樓に上る」では、牧齋が「舊を思う心」を表現している。『文選』³³所収の向秀「思舊賦」序に、「時に於いて日は虞淵に薄り、寒冰凄然たり。鄰人に笛を吹く者有り、音を發すること寥亮たり。曩昔遊宴の好しきを追思し、音に感じて歎じ、故に賦を作りて云く」とあるが、向秀の賦の本文や序には「高樓」のイメージは登場せず、これは牧齋が付け加えたものである。「高樓に上る」は高い所に登って遠くを見やることを意味する。この一語を置くことによって、牧齋が研祥を深く思いやる気持ちががいよいよはっきりと現われてくるのである。（翻訳終

わり)

【補説】

以下にもう一度原作をあげておく。

推篷剪燭夢悠悠 篷を推し燭を剪りて夢悠悠たり

舊雨依稀記昔遊 舊雨 依稀として昔遊を記す

南國梟盧誰劇孟 南國の梟盧 誰か劇孟たる

北平雞酒有田疇 北平 雞酒 田疇有り

霜前啼鳥皆朱囁 霜前の啼鳥 皆な朱囁たり

月下飛鳥盡白頭 月下の飛鳥 盡く白頭なり

病樹枝顛天一握 病樹 枝顛 天は一握

爲君吹笛上高樓 君が爲に笛を吹きて高樓に上る

廣陵人傳研祥北訊。 廣陵の人研祥の北訊を傳う。

この詩の第一聯が、当時北方に滞在しており、以前錢牧齋が金陵の獄にあった折に金漸皋とともに訪ねてきてくれた高弟馮研祥への綿綿たる思いをうたっていることは嚴氏の考証の通りであると思う。また第二聯が馮研祥の義侠心に満ちた人柄を詠じていることも確かであろう。

問題は第三聯にある。第三聯の上句は「霜前の啼鳥 皆な朱囁たり」である。嚴氏は「朱囁」は杜鵑の代称であり、嘴の色が赤いため、杜鵑は泣いて血を吐くという伝説がうまれた」と述べている。この部分の錢曾注は「朱囁は前注に見ゆ」とだけ言っており、「前注」は有學集卷三に収められた「早發七里灘」詩にある。「西臺に哭さんと欲するも還お未だ忍びず、空に唳く朱囁 雲端に響く」について、錢曾は「謝皋羽の「西臺慟哭記」、即ち釣臺なり。其の招魂の詞に曰く、「化して朱鳥と爲り、囁有るも焉んぞ食せんや？」と。」と述べている。これは、謝皋羽が南宋の宰相文天祥を哭した文章であり、「朱囁」は謝皋羽が南宋の宰相文天祥の魂を招いた言葉「化して朱鳥と爲るも、囁有り焉んぞ食せんや？」を意識していることは間違いない。もちろん南宋の亡国には明の亡国が重ねられているのであり、「霜前の啼鳥 皆な朱囁たり」とは、清の侵略に抵抗して犠牲となった人々を示すことは明らかである。下の句「月下の飛鳥 盡く白頭なり」は、「廣陵の人」から伝え聞いた馮研祥の行動と見聞をうたっているのではないか。具体的にはどういうものであったかはわからないが、例えば顧炎武が明滅亡後に十三陵や南京の孝陵を訪れて追悼したといった行為を想像することもできるし³⁴、北京の情勢を探るなどの諜報活動であったかもしれない。表沙汰にはできない情報を含むものではなかったか。そうだとすると下句「月下の飛鳥 盡く白頭なり」が非常にきいてくる。これからすぐに連想されるのは、杜甫が占領下の長安で詠んだ「哀王孫」の冒頭の一句「長安城頭の頭白き鳥」である。

長安城頭頭白鳥 長安城頭の頭白き鳥

夜飛延秋門上呼	夜延秋門上に飛びて呼ぶ
又向人家啄大屋	又た人家に向いて大屋を啄ばみ
屋底達官走避胡	屋底の達官 走りて胡を避く
金鞭斷折九馬死	金鞭は斷折して九馬死し
骨肉不待同馳驅	骨肉の同に馳驅するを待たず
腰下寶玦青珊瑚	腰下の寶玦は青珊瑚
可憐王孫泣路隅	憐れむ可し王孫は路隅に泣く
問之不肯道姓名	これに問うも肯て姓名を道わず
但道困苦乞為奴	但だ道う困苦にして乞うて奴と爲ると
已經百日竄荆棘	已經に百日も荆棘に竄れ
身上無有完肌膚	身上は完き肌膚有る無し
高帝子孫盡隆準	高帝の子孫は盡く隆準なり
龍種自與常人殊	龍種は自ら常人と殊なれり
豺狼在邑龍在野	豺狼は邑に在り龍は野に在り
王孫善保千金軀	王孫 善く保て千金の軀
不敢長語臨交衢	敢て長語して交衢に臨まず
且爲王孫立斯須	且つ王孫の爲に立つこと斯須す
昨夜東風吹血腥	昨夜東風は血を吹いて腥く
東來橐駝滿舊都	東來の橐駝は舊都に滿つ
朔方健兒好身手	朔方の健兒は好身手
昔何勇銳今何愚	昔は何ぞ勇銳にして今は何ぞ愚なる
竊聞天子已傳位	竊に聞く天子は已に位を傳え
聖德北服南單于	聖德は北のかた南單于を服し
花門勞面請雪恥	花門 勞面 恥を雪がんと請うと
慎勿出口他人狙	慎みて口より出すこと勿れ 他人狙う
哀哉王孫慎勿疏	哀しい哉 王孫 慎みて疏なること勿れ
五陵佳氣無時無	五陵の佳氣 時として無きは無し

で歌いおさめられる。

「哀王孫」詩の「頭白鳥」の典故は、錢牧齋は「朱長孺に和す來韻を用う」（『有學集』卷五所収）において、「寒風颯拉たり霜林の暮、愁絶す延秋の頭白き鳥に」とあるように他でも使用しており、錢曾も「少陵哀王孫に、「長安城頭の頭白き鳥、夜延秋門上に飛びて呼ぶ。」とあり」と注釈で述べているので、「月下の飛鳥 盡く白頭なり」が「哀王孫」を意識していることは間違いないと思う。さらに、この詩について錢牧齋は『錢注杜詩』卷一「哀王孫」の箋注で、「至徳元載九月、孫孝哲は藿國長公主、永王妃及び駙馬楊駟等八十人を害す。又た皇孫二十餘人を殺す。並びに其の心を刳り、以て安慶宗を祭る…。有宋靖康の難、羣臣金人に搜索され、趙氏は遂に遺種無し。此の詩を讀むに、一轍に出づるが如し。」³⁵と述べ、ある種の感慨を発している。満州族

に占領された北京を安祿山占領下の長安に見立てていることは明らかであろう。「西烏」と「白頭」は危急存亡の時に発する言葉である。牧齋のこの聯は、自分と研祥が故国と旧君を忘れない遺民であり、危険な境遇にあることを比喩しているのではないだろうか？」という嚴氏の解釈も成立すると思うが、私は馮研祥が北京で見聞しつつあった事態を示唆していると考えたい。もう一步進んで、馮研祥が「王孫」並みの危機に陥っていたとするなら、さらにこの典故が生きてくるだろう。こう解すると、最後の二聯についての「これから判断すると、研祥は官長とのあいだにイザコザが起り、外地に流浪していたのかもしれない」という嚴氏の箋釋もより生きてくるのではなかろうか。

(二)「病榻消寒雜咏」其の二十五

望崖人遠送孤籐 崖を望む人は遠く孤籐を送り
粟散金輪總不應 粟散 金輪 總べて應ぜず
三世版圖歸脱屣 三世の版圖 歸すこと屣を脱ぐがごとし
千年宗鏡護傳燈 千年の宗鏡 傳燈を護る
聚沙塔湧幡幢影 聚沙の塔なりて湧く幡幢の影
墮淚碑磨鼯鼠稜 墮淚の碑は磨ぶ鼯鼠の稜
莫歎曾孫顛頽盡 歎く莫れ曾孫顛頽し盡すを
大梁仍是布衣僧 大梁 仍お是れ布衣の僧なり
讀黃魯直先忠懿王像贊有感 黃魯直先忠懿王の「像贊」を讀みて感有り

【箋釋】

牧齋のこの作品は、先祖の業績を回想したものだが、自分の衰えや困窮を憐れみ、首を垂れて思いに沈み、末尾で先祖のように仏法に帰依し得たと自らを慰めているのである。詩の後に「黃魯直先忠懿王の「像贊」を讀みて感有り」という自注がある。宋代黃庭堅（魯直）『山谷集』卷十四「錢忠懿王畫贊」に云う、「文武忠懿、堂堂として春の如し。中に樗里³⁶有るも、以て人に示さず。八區³⁷に雷行し、震驚聽聞せしむ。十五州を掲げて、共に帝民と爲る。君を送る者崖自り反り、以て其の子孫を安樂にす。九萬里なれば則ち風は斯ち下に在り³⁸、大物を眇て仁を爲す。」³⁹五代の忠懿王が領地を趙氏の宋に明け渡し、「共に帝民と爲」ったことが、「仁を爲」した行為であり、そのお蔭で統治下の人民は「其の子孫を安樂」にし得た賞賛している。忠懿王はすなわち五代十国の呉越王錢俶（929-988）であり、牧齋はその二十二世の後裔であった。牧齋『有學集』卷四十九の「武林兩關碑記に題す」でも、「昔我が先王、國呉越を有つ。五代濁亂の季に當り、十四州の蒼赤を生全せしめ、父仰ぎ子俯き、昌大繁庶す。」と書いていて、黃庭堅の「錢忠懿王畫贊」に賛意を示している。牧齋の詩の首聯は、「崖を望む人は遠く孤籐を送り、粟散 金輪 總べて應ぜず」である。下の句で、「粟散」、「金輪」といっているのは、唐代の釋道世『法苑珠林』が「貴賤」を説く次の章段に

基づいている、「貴賤を總束するに、合に六品有るべし。一は貴中の貴、輪王等と謂う。貴中の次、粟散王等と謂う。三は貴中の下、百僚等の如しと謂う。四は賤中の賤、駘驚豎子等と謂う。五は賤中の次、僕隸等と謂う。六は賤中の下、姬妾等と謂う。僉束すれば是の如し、細分すれば盡くし難し。」⁴⁰牧齋の句は「總て應ぜず」と続いており、祖先は王者であったが、自分は貴顕でもなんでもないと嘆いているのである。

次聯は、「三世の版圖 歸すこと屣を脱ぐがごとく、千年の宗鏡 傳燈を護る。」である。「屣を脱ぐ」は、『漢書』郊祀志の「天子曰く、「嗟あ、誠し黃帝の如きを得れば、吾妻子を去るを見ること屣を脱ぐが如きのみ」と。」⁴¹、『三國志』魏書崔林傳の「刺史此の州を去るを視ること屣を脱ぐが如し、寧んぞ當に相い累わすべけんや？」⁴²、『列仙傳』范蠡の「千金を屣脱して、道と與に舒卷す」⁴³などに基づく。この句の本事は吳越王が領地を趙氏の宋に明け渡した史実である。明代の馮琦原編、陳邦瞻增輯の『宋史紀事本末』卷二によって概略を示すと、「太宗太平興國三年三月己酉、吳越國王俶來朝す。……其の臣崔仁冀曰く、「朝廷の意知る可きなり、大王速やかに土を納めざれば、禍は且に至らんとす！」と。俶の左右、争言して不可なりと言う。仁冀聲を厲まして曰く、「今已に人の掌握に在り、且つ國を去ること千里、惟だ羽翼有りて乃ち能く飛去するのみ」と。俶遂に策を決し、上表して其の境内十三州、一軍、八十六縣を獻ず。俶朝より退き、將吏始めてこれを知り、皆慟哭して曰く、「吾が王歸らざるなり！」と。」⁴⁴これがつまり「三世の版圖 歸すこと屣を脱ぐがごとし」である。上の句は先祖が「國を失った」事跡を詠じ、下の句は忠懿王の「千秋の大業」を賞賛する。「宗鏡」は延壽が著した『宗鏡錄』である。馬端臨『文獻通考』卷二百二十七に、「晁氏曰く、「皇朝僧延壽撰。……建隆の初め、錢忠懿命じて靈隱に居らしめ、釋教の東流し、中夏の學者大全を見ず、而うして天台、賢首、慈恩性相の三宗も又た互相いに矛盾するを以て、乃ち重閣を立て、三宗の知法の僧を館して、更相いに詰難し、詖險の處に至らば、心宗の旨要を以てこれを折衷せしむ。因りて方等の祕經六十部、華梵聖賢の語三百家を集めて、以て三宗の義を佐け、此の書を成す。佛を學ぶ者これを傳誦す」と。」⁴⁵とある。吳越王は仏教に深く帰依し、法師延壽を厚遇し、度々庇護を与え、延壽の『宗鏡錄』が完成すると自ら序文を書いた。「傳燈を護る」とは、仏法を護持して永遠に伝えてゆくことを意味する。禪宗には『景德傳燈錄』に類する書物が多々ある。燈が暗闇を照らすように、禪宗では代々教えを弟子に授け、法を次の世代に伝えてゆくが、これがあたかも燈を伝えるが如きであるため、こう名付けたのである。その体例は高僧伝と語録の中間であり、高僧伝と比較すると、僧侶の事跡に関する記述が少ない反面、言葉の記述は多い。語録と比較すると、傳燈錄は語録の精要を収録し、伝承の順序に従って配列しているため、史部の譜録に相当する。牧齋のこの句は、祖先が仏法の伝承に対して為しとげた巨大な貢献は、永遠に語り伝えられるべき偉業であると賞賛している。この聯は上の句で世間における功德、下の句で仏法の領域における貢献を描写し得ており、一失一得⁴⁶、読者に様々な聯想を起こさせ、対句の妙を尽くしている。

第三聯は「聚沙の塔なりて湧く幡幢の影、墮淚の碑は磨ぶ鼯鼠の稜」である。牧齋はこの聯において、数多くの典故を駆使しており、何を言おうとしているのか分かりにくい。上の句は二つの典故を含み、どちらも仏教の典籍に基づく。「聚沙の塔」は、細かい砂を集めて宝塔を作ること、子供の遊びである。『妙法蓮華經』方便品に、「乃はなはだしきにいた至りては童子戯れて、沙を聚めて佛塔を爲る、是の如き諸人等は、皆已に佛道を成ず」とある。その理由は、「乃はなはだしきにいた至りては童子戯れて、若し草木及び筆、或いは指爪甲を以て、畫えがいて佛像を作さば、是の如き諸人等は、漸漸に功德を積み、大悲心を具足すれば、皆已に佛道を成ず」⁴⁷である。兒童が砂を集めて宝塔を作るだけでこのような功德を積むことができるのであるから、呉越王が実際の仏塔を建造し、仏に事えた事跡は、今なお世人の賞賛を浴びている。『佛祖統記』に、「呉越王錢俶、天性佛を敬い、阿育王造塔の事を慕い、金銅精鋼を用いて八萬四千塔を造り、中に『寶篋印心呪經』を藏し、部内に布散し、凡そ十年にして功を訖おう」⁴⁸という。「幡幢」は「幢幡」であり、寺院に掲げられた旗である。『法苑珠林』に、「或いは佛塔菩薩を見、或いは僧眾列坐するを見、或いは帳蓋幡幢を見る」⁴⁹とある。兒童が遊びで砂を集めて塔を作ると、三宝が感応し、諸天が歓喜し、幡幢が湧き出る。呉越王が金銅精鋼を用いて十年間塔を建造し続け、塔の中に經典を設置したが、この塔の莊嚴さ、美しさはさらに不可思議なものであった。この聯の上下句の対比は強烈である。「墮淚の碑」は詩文で常用される典故であるが、末聯の二句と合わせ見ると、牧齋のこの句は実は蘇軾の「表忠觀の道士の杭に歸るを送る」詩に基づくことが分かる。旧注には云う、「先生「表忠觀碑」に趙忭杭州おさを知むるときの言を載す、故呉越國王錢氏墳廟の錢塘臨安に在る者は、皆蕪廢して治めず、請う妙因院を以て觀と爲し、錢氏の孫の道士爲る者で自然と曰う者をしてこれに居り、以て其の墳廟を守らしめんことを請う。詔してこれを許し、妙因を改めて表忠觀と爲す。」⁵⁰（宋代王十朋『東坡詩集注』に引く次公の語）とあり、坡公⁵¹の時には、錢氏呉越王の墳廟はすでに荒れ果て、誰も世話をする者がいなかったことが分かる。蘇軾の詩に、「先王の舊徳は民心に在り、令に著わして⁵²忠と稱するは上意深し。涙を墮し行ゆく看る祠下に會するを、名を掛け争いて欲す碑陰に刻さんことを。凄涼たる破屋 塵は坐に凝り、憔悴たる雲孫 雪は簷に滿つ。未だ信ぜず諸豪の郭解を容し、却って他縣従り千金を施さしめんとは。」⁵³とある。「墮淚碑」は、襄陽の人々が、峴山において羊祜が普段休憩していた場所に廟と碑を建て、季節ごとにお祭りした。この碑を望む者は皆涙を流した。杜預はこれに因んで「墮淚碑」と名付けた。羊祜はある時言った、「宇宙有りて自り、便ち此の山有り。由來賢達と勝士、山に登りて遠望すること、我と卿の如き者多し。皆湮滅して聞く無く、人をして悲傷せしむ。如し百歳の後知る有らば、魂魄猶お應に此れに登るべきなり。」⁵⁴唐代に入り、李白が「襄陽曲」を作り、「峴山 漢江に臨み、水は緑にして沙は雪の如し。上に墮淚の碑有り、青苔 久しく磨滅す。」⁵⁵という句が見える。「鼯鼠」は力強い勇士の形容詞である。「鼯鼠稜」はおそらく墮淚碑の基座と本体に刻されていた靈獸や力士のレリーフであろう。牧齋のこの句では「碑」といい、また「鼯鼠稜」

と言っている。もともと永久に堅牢であることを期待されるはずの碑であるが、「磨」の一字が挟まれているため、この碑はすでに荒れ果てて磨滅していたことが分かる。この聯は次の聯の意味と合わせて、呉越王が仏教を比護し、現世においても多大な功績をあげ、仏教への影響は現在にも及んでいるにもかかわらず、歴史上の功業は泯滅してしまつたと詠じているのである。

末聯は「歎く莫れ曾孫顛頼し盡すを、大梁 仍お是れ布衣の僧なり。」である。この聯はかなりかなり気を込めて歌い納められている。「曾孫」については、『事林廣記』に、「俗に傳う、玉帝と太姥の魏真人武夷君、幔亭綵屋數百間を建て、雲袂紫霞の褥を施き、郷人の男女千餘人を其の上に宴せしめ、皆呼びて曾孫と爲す。」⁵⁶とある。「曾孫」と「顛頼」というのは、実は坡公の「表忠觀の道士の杭に歸るを送る」詩の一聯「淒涼たる破屋 塵は坐に凝り、憔悴たる雲孫 雪は簪に滿つ」を換骨奪胎している。旧注に、「此れは錢道士を指して言うなり。『爾雅』に、「子の子を孫と爲す、孫の子を曾孫と爲す、曾孫の子を玄孫と爲す、玄孫の子を來孫と爲す、來孫の子を晁孫と爲す、晁孫の子を仍孫と爲す、仍孫の子を雲孫と爲す。」とあり、注に「輕遠なること浮雲の如し」と云う。」⁵⁷とある。「曾孫」というのは呉越王の苗裔である。下の句の「大梁布衣」という言葉は、宋李燾撰『續資治通鑑長編』卷十五の「(開寶七年十一月)戊子、呉越王俶使を遣りて修貢せしむ、招撫制置の命を謝すなり。並びに江南國主遣る所の書を上る。其れ略ほ云う、「今日我無くなれば、明日豈に君あらんや。明天子一旦地を易え勲に酬ゆれば、王も亦た大梁の一布衣なり。」と。」⁵⁸に基づく。「布衣の僧」は牧齋が自らを喩えているのである。「大梁は仍お是れ布衣の僧」は、功業は成就せず、自分はやはりただの僧侶にすぎないという意味である。この句は牧齋が仏法に帰依しようという揺るがない決意を表明したものである。(本詩の更に一步進んだ解釈は本書上編の「蒲團歴歴前塵の事」を参照のこと。)

【補説】

ここまでの嚴志雄氏の箋釋である。以下に私見を述べる。この詩の理解の基本線は嚴氏に従う。つまり、第二十五首は、錢牧齋の祖先呉越王錢俶へのオマージュである。呉越王錢俶は、南唐の後主李昱とは異なり、戦火を交えることなく、領民を一人も傷つけることなく、自分の領土を宋の太祖に明け渡したのである。また錢俶は仏法の厚い庇護者であり、高僧延壽に『宗鏡錄』を編纂させるなど、大きな貢献をなした。錢牧齋はこの二点を非常に誇りに思っていたのは事実であろう。最後の一句「大梁は仍お是れ布衣の僧」についての解釈もまず間違いはないと思う。ただ嚴氏の解釈では掬いきれない要素がもう一つあると考える。それは錢氏の深く心に秘めた傷である。嚴氏もこの書の冒頭で引いている『清史稿』文苑傳錢謙益傳を見てみよう⁵⁹。

錢謙益、字は受之、常熟の人。明萬曆進士、編修を授かる。博學にして詞章に工みにして、名を東林黨に隸す。天啓中、御史陳以瑞劾してこれを罷む。崇禎元年[1628]、起官し、數月ならずして禮部尚書に至る…。流賊京師を陥いれ、明臣君を

江寧に立つるを議す。謙益は陰かに潞王を推戴せんとし、馬士英と議合わず。已にして福王立ち、罪を得るを懼れ、上書して馬士英の功を誦し、士英は引きて禮部尚書と爲す。復た力めて閹黨の阮大鍼等を推し、大鍼は遂りて兵部侍郎と爲る。順治三（「二」であるべきである。）[1645] 豫親王多鐸江南を定めるや、謙益は迎降し、命ずるに禮部侍郎管秘書院事を以てす。馮銓明史館正總裁に充てらるるや、謙益はこれに副たり…。

錢牧齋生涯の汚点とされる清への投降と出仕が、『清史稿』には非常に簡潔に記載されている。真偽の程は分からないが、徐鼎撰の『小腆紀年』⁶⁰卷十に牧齋の手になるという明の残存勢力に降伏を勧める檄文が載せられている。その内容は先ず、遼金元以来、砂漠から入り、中国の主人となった国々の中で、大清ほどすばらしい国は無いではないかと、ひたすら清の徳を褒め称える。曰く、「我が累朝の陵寢を護持し、我が十廟の宗祧を補復し、其の諸藩を優恤し、其の殘黎を安輯⁶¹し、其の遺臣を擢用し、其の舊政を舉行し、恩深く誼崇く、義を盡くし仁至ること、大清の如き者有らんや？」そのような大清であればこそ、「大江を渡れば風伯は效靈し、金陵に入りては天日開朗なり。千軍萬馬、寂として人聲無く、白叟黃童朝市に聚まる」と、あたかも宋の太祖のクーデタのように、南京に整然と入場したのである。そこで檄文は明の残存勢力に、「天命の歸する所を識り、大事の已に去るを知り、誠に投じ命に歸し、億萬の生靈を保つ、此れ仁人志士の爲す所にして、大丈夫これを以て自ら決すべし」と呼びかける。末尾は、「乙酉 [1645年] 五月、南京文武諸臣趙之龍等謹みて白す」と結ばれており、徐鼎は「相い傳う以て錢謙益の筆と爲すなり」と述べ、これが錢牧齋の撰文であると見做している。緊急事態の中、このような檄文を錢牧齋が書かざるを得なかった可能性は十分ある。

その後、錢牧齋は郷紳たちの激しい攻撃にさらされ、自分の行動を弁護する文章を書かざるをえなくなった。それが「邑中の郷紳に與⁶²うる書」である。彼等郷紳たちは、自分の事は棚に上げ、「節に仗り義を擧げ、天を頂せ地に立ち、個個是れ張睢陽、人人是れ文信國なり」と愛国の士を気取って錢牧齋を罵り、「大兵虞に入るは不肖（錢牧齋）の主張自り出づ」という流言飛語まで飛び出した。錢牧齋はそれに強く反駁する。

大兵京城の外に到りて纔に一日、僕は身を挺して營に入り、四郡を招撫するの議を創む。此の時營壘初めて定まり、兵勢汹涌たり、風鶴驚危し、死生呼吸にあり。僕は真に大事已に去り、殺運方に興るを見る。身を棄て命を捨て、萬姓を保全するの計の爲に、不測を觸冒し、此の大口を開く。…吳中の變の後、豫王に面啓し、搶殺を禁戢するを懇求し、別に逆順を明らかにす。抗論往復すること數四、王頗る色變じ容動き、衆は皆舌を縮め股を慄わす。南都の文武大臣は、嘆息して相い告ぐ。故を以て豫王の令旨に「生靈を救うを志す」の語有り。郷里を殘害せんと欲する者、固より是の如くなるや？服すれば則ちこれを捨て、叛すれば則ちこれを討つ、此れ大兵の律令にして、獨り吳中のみならざるなり。

降伏の使者であっても、決して容易に説得が成功したわけではなく、殺気漂う清軍の陣営に入ったこと、豫王の説得にはかなり時間がかかり、ようやく虐殺を免れたのだ、と錢牧齋は訴える。ただ「服すれば則ちこれを捨て、叛すれば則ちこれを討つ、此れ大兵の律令にして、獨り呉中のみならざるなり。」と述べているのはたとえそれが現実であったにせよ、当時物議をかもしたことは想像に難くない。

錢牧齋が仏教を厚く庇護し、「三世の版圖 歸すこと屣を脱ぐがごと」く、抵抗することなしに版図を宋に献じて四郡の人民を救った祖先を賞賛する時、頭によぎるのは、自分が降伏の使者に立ち、南京を清軍の虐殺から守ったという事実（あるいは自負）と、その後蒙った郷紳たちの強烈な非難であったことは間違いないであろう。これは錢牧齋にとって生涯まわりつく心の傷（いわゆるtrauma）であり、表面には出てこないが、「其の二十五」のモチーフとなり、この詩を作ったことにより、彼の心の傷はある程度癒されたのである。

注

- 1 『錢牧齋全集』の『有學集』卷13、636-674頁。
- 2 嚴志雄『錢謙益「病榻消寒雜咏」論釋』（台北：中央研究院、2012）
- 3 陳寅恪『柳如是別傳』（上海：上海古籍出版社、1980）
- 4 錢謙益『列朝詩集小傳』（上海：上海古籍出版社、1983）
- 5 訳者注：房次律は唐代の宰相房琯を指す。
- 6 訳者注：「軒輊」は毀誉褒貶すること。『新唐書』楊虞卿傳に、「宗閔これを待つこと尤も厚し、就ち黨中の最も能く唱和する者爲りて、口語を以て事機を軒輊す、故に時に黨魁と號す。」とある。
- 7 訳者注：「宋金華」は明初の官僚・文学者宋濂を指す。
- 8 錢謙益、錢曾箋、錢仲聯標校、『牧齋初學集』（上海：上海古籍出版社、1985）
- 9 錢謙益、錢曾箋、錢仲聯標校、『牧齋有學集』（上海：上海古籍出版社、1996）
- 10 葛萬里『牧翁先生年譜』、雷瑒・君曜編『清人說薈二會』（上海：掃葉山房1917）所収。
- 11 黄宗羲、沈善洪主編、『黄宗羲全集』（杭州：杭州古籍出版社、2005）
- 12 訳者注：この他、『初學集』卷五十「山東道監察御史贈太僕寺卿黄公墓誌銘」に、「公没するの次年、子宗羲闕に詣きて冤を訟え、天子は公に太僕寺卿を贈り、祖父は皆な其の官の如くし、一子を蔭して太學に入らしめ、祠を邑の文昌閣の前に立つ。慈谿の馮公元颺は其の弟元颺と特牲を具えて往きて拜し、諸生馮文昌等數百人は祠下に胥く會す」とある。
- 13 訳者注：「詹尹」は古代の卜筮者の名である。『楚辭』卜居に、「心煩しく慮亂れ、従う所を知らず。往きて太卜鄭詹尹に見ゆ。」王逸の注に、「鄭詹尹は、工の姓名なり。」とある。
- 14 訳者注：「握別」は手を握って別れること。

- 15 訳者注：「意生」は佛教語で菩薩をいう。『文選』王巾の「頭陀寺碑文」に、「學地を以て知る可からず、意生を以て及ぶ可からざるは、其れ涅槃の藎なり。」とある。
- 16 訳者注：嚴氏は注記しておられないが、李義山の詩は卷末の参考文献にあげられている、『御定全唐詩』から引用されているであろう。『御定全唐詩』（台北：臺灣商務印書館）、1983年『景印文淵閣四庫全書』影印國立故宮博物院藏本、第1423-1431冊。
- 17 四庫全書本集部詩文評類の『懷麓堂詩話』は、「維揚周岐鳳多藝能、坐事亡命、扁舟野泊無錫。錢擘投之以詩、有「一身爲客如張儉、四海何人是孔融。野寺鶯花春對酒、河橋風雨夜推篷」之句。岐鳳得詩、爲之大慟、江南人至今傳之。」となっており、嚴氏の引用と一致している。
- 18 訳者注：張儉は党錮の獄中の人。竇武、陳蕃、劉淑を三君と称し、李膺、杜密等八人を八俊と称し、郭泰、范滂等八人を八顧と称し、張儉、翟超等八人を八及と称し、度尚、張邈等八人を八廚と称した。『後漢書』黨錮傳序。
- 19 四庫全書本『明詩綜』卷二十三に載せる錢擘の詩の題は「贈澄江周岐鳳」で、「琴劍漂零西復東、舊游清興幾時同。一身作客如張儉、四海何人是孔融。野寺鶯花春對酒、河橋風雨夜推篷。機心盡付東流水、惟有家山在夢中。」で、嚴氏の引用と一致している。
- 20 司馬遷、裴駟集解、司馬貞索隱、張守節正義、『史記』（北京：中華書局、1959）
- 21 王嘉、『拾遺記』（台北：臺灣商務印書館）、1983年『景印文淵閣四庫全書』影印國立故宮博物院藏本、第1042冊。
- 22 訳者注：「九地」は地下、もしくは黄泉の意味である。
- 23 訳者注：嚴氏は参考書目にはあげていないが、おそらく四庫全書本『樂府詩集』（文淵閣『四庫全書』第1347-第1348冊）を使っているであろう。
- 24 訳者注：楽曲が終了した後、他の詞でそれに唱和するのを「送聲」という。
- 25 劉義慶、劉孝標注、『世說新語』（台北：臺灣商務印書館）、1983年『景印文淵閣四庫全書』影印國立故宮博物院藏本、第1035冊。
- 26 李昉編、『太平廣記』（台北：臺灣商務印書館）、1983年『景印文淵閣四庫全書』影印國立故宮博物院藏本、第1043-1046冊。
- 27 訳者注：人を脅かすような言動をして他人をびっくりさせること。
- 28 訳者注：「西陵」は「西泠」で杭州を指す。この句は「杭州に住む背の低い馮研祥」の意味となる。嚴氏指教。
- 29 訳者注：非凡なさま。
- 30 訳者注：举止が端麗な様。
- 31 訳者注：「跼蹐」は歩き方がバランスに欠ける様。
- 32 訳者注：半人前であるという意味。
- 33 蕭統編、李善等注、『六臣注文選』（台北：臺灣商務印書館）、1983年『景印文淵

- 閣四庫全書』影印國立故宮博物院藏本、第1330-1331冊。
- 34 訳者注：全祖望「亭林先生神道表」（四部叢刊本『鮚埼亭集』卷十二）に、「戊戌、遍く北都の諸畿甸に遊ぶ、直ちに山海關外に抵り、以て大東を觀る。歸りて昌平に至り、長陵以下に拜謁し、圖してこれを記し、次年再び謁す。既にして江南山水未だ盡くさざる有るを念い、復た六たび孝陵を謁し、東遊して直ちに會稽に至る。次年復た北のかた思陵に謁し、太原大同由り以て關中に入り、直ちに榆林に至る…。」とある。
- 35 『錢注杜詩』上海古籍出版社1979年排印本。
- 36 訳者注：「樛里」は樛里疾の略称。戰國秦惠王の異母弟で樛里に住み、「樛里子」とも自称した。言葉に巧みで、聡明であり、秦人は「智囊」と呼んだ。
- 37 訳者注：「八區」は天下を言う。『漢書』揚雄傳下に、「天下の士、雷動き雲合するがごとく、魚鱗のごとく雜わり襲なり、咸な八區に營む」とあり、顔師古の注に、「八區は八方なり」という。
- 38 訳者注：『莊子』逍遙游に、「風の積むこと厚からざれば、則ち其の大翼を負うに力無し。故に九萬里なれば則ち風は斯ち下に在り」とあり、大鵬が風の力を借りて遠方まで到達すると述べている。後に「風斯在下」で、古人をはるかに凌ぐことを比喩した。
- 39 ☆宋黃庭堅『山谷集』（台北：臺灣商務印書館、1983年『景印文淵閣四庫全書』影印國立故宮博物院藏本、第1113冊）卷14、頁21a。訳者注：この「錢忠懿王畫贊」はまったくの同文が『東坡全集』卷九十四にも見える。
- 40 ☆『法苑珠林』卷5、大藏經刊行會編、『大正新脩大藏經』（台北：新文豐出版公司、1983年影印大正13年-昭和9年大正一切經刊行會排印本）第53冊、第2212經、頁306a-b。
- 41 ☆『漢書』（北京：中華書局、1962）卷25上、1228頁。
- 42 ☆『三國志』（北京：中華書局、1959）卷24、679頁。
- 43 ☆『列仙傳』（『景印文淵閣四庫全書』、第1058冊）卷上、頁12a。
- 44 ☆明馮琦原編、陳邦瞻增輯、『宋史紀事本末』（『景印文淵閣四庫全書』第353）卷2「吳越歸地」、頁2b-3a。
- 45 ☆清馬端臨著、『文獻通考』（『景印文淵閣四庫全書』、第610-616冊）卷227、「宗鏡錄一百卷」、頁9b-10a。
- 46 訳者注：一方では国を失いはしたが、一方では仏法に対して多大な貢献をした。
- 47 ☆『妙法蓮華經』卷1、『大正藏』、第9冊、第262經、頁9a。
- 48 ☆『佛祖統記』卷43、『大正藏』、第9冊、第262經、頁9a。
- 49 訳者注：訳者が確かめ得たのは『四部叢刊』本、卷22にある。
- 50 ☆宋王十朋、『東坡詩集註』（『景印文淵閣四庫全書』、第1109冊）に引く次公の語、卷15、頁38a。
- 51 訳者注：蘇軾の号が東坡なので蘇軾を指す。

- 52 命令を下すこと。
- 53 ☆宋王十朋、『東坡詩集註』（『景印文淵閣四庫全書』、第1109冊）卷15、頁38a-b。
- 54 ☆唐房玄齡等奉敕撰『晉書』羊祜傳（北京：中華書局1974）卷34、1020頁。
- 55 ☆唐李白『李太白文集』（『景印文淵閣四庫全書』、第1066冊）卷4、頁4a-b。
- 56 ☆宋祝穆『古今事文類聚』（『景印文淵閣四庫全書』第925-929冊）前集卷34、「武夷冲佑觀」、頁3a。
- 57 ☆宋王十朋、『東坡詩集註』（『景印文淵閣四庫全書』、第1109冊）に引く次公の語、卷15、頁38b。
- 58 ☆宋李燾『續資治通鑑長編』（『景印文淵閣四庫全書』、第314-322冊）卷15、頁15b-16a。
- 59 ☆趙爾巽、『清史稿』（北京：中華書局、1976-1977）、卷484、13324頁。
- 60 訳者注：中國書籍電子化計画本による。
- 61 訳者注：「安輯」は安護という意味である。
- 62 訳者注：『錢牧齋全集』の『牧齋外集』第二十二書一823頁。

要旨

「病榻消寒雜咏四十六首」は錢牧齋が康熙二年（1663年）十二月二十八日に書き始めた七言律詩の連作である。康熙三年五月二十四日に錢牧齋は亡くなっているのに、「病榻消寒雜咏四十六首」は彼の遺作といえるであろう。嚴志雄氏の『錢謙益「病榻消寒雜咏」論釋』は錢氏の遺作の典故を明らかにし、詳細に分析した書物で、現代の中国文学研究界の一つの到達点を示す作品である。嚴志雄氏の「箋釋」は牧齋の詩を「古典」(classical allusions)と「今典」(topical allusions)の二つの面から解き明かそうとする。「読者が詩の本文、注の文章、箋の文章を別個に読む必要がなく、無理なく最後まで読み通し、詩全体の趣旨、イメージ、背景的知識をはっきりとつかみ、牧齋の詩の奥深いところまで到達すること、これこそ本書の最終目的である。今日、古典詩文の注釈に新たな命を吹き込むために本書における箋釋の論述の方法は、些かの貢献をなすものと信ずる。」(36頁)と嚴氏は述べる。本論では、箋釋編の二篇を翻訳し嚴氏の方法論の一端を垣間見ていただくと同時に、大平の補論を付け加える。